

日本語動詞の多義体系 (6) *

国 広 哲 弥

The series of papers with the title attempt to analyze the polysemous organization of Japanese main verbs with a view to clarify the semantic relations among the polysemous meanings of a verb. This paper deals with verbs *nozomu* and *nobiru*.

In this paper the author announces the renaming of ‘phenomeneme’ as ‘cognitum’ to avoid possible misunderstanding.

望む・臨む

1. 別語か多義語か。

「のぞむ」という動詞はふつう「望む」とも「臨む」とも書き分けられる。この 2 語を別語とみなすか 1 個の多義語とみなすかは、国語辞典によって異なっている。1 個の多義語とみなしている辞典は『新明解』、『角川必携』、『岩波国語』、『岩波古語』の 4 辞典で、あとは別項目扱いをしている。しかしその中でも『言泉』、『新潮国語』、『三省堂』、『大辞泉』、『大辞林』は語源的には同語であるとしている。両動詞は同源とはいいながらそれぞれの多義ははっきりと二種類に分かれている。しかしある観点に立てば、全体をひとつの多義語と見ることも可能である。『岩波古語』に従えば、「臨む」という動詞は漢字「臨」をノゾムと訓読みしたことから生じたものであるということであるから、当時の人々は「望む」と「臨む」に何らかの意味的な関連性を認めていたわけであり、それぞれの動詞の多義の状況も昔と今とほとんど変わっていないので、意味派生が次々に進んで現在の状況に達したというわ

けでもない。そのようなわけで、ここでは両動詞が単一の多義語を構成するものとして見て行く。昔の人々は同じ「ノゾム」を当てながらも、助詞を「を望む」、「に臨む」とはっきり使い分けていた点に注意したい。

2. 「臨む」の意味派生の過程。

そもそも「臨」はどういう意味を表わしていたのであろうか。その字解については漢和辞典により異なる。『字通』と『新漢和』は「臥+品」と分解し、〈臥して下界に臨む〉ことを指すとする。『漢字語源』は「訃+品」の会意で、意味は〈高きをもって下を視るなり〉であるとする。『岩波新漢語』は「臣+人+品」と分解し、〈人が高い所から下方のいろいろの物を見おろす意〉とする。字形の分解のしかたは異なるが、字義のほうは結果的にはほぼ等しく、〈低いところを見下ろす〉と考えてよい。この意味を和語で表わそうとして「にのぞむ」を当てたものである。元々〈物事を求めて、遙か遠くまでを見る〉[岩波古語] という意味であった「望む」に「に」を付けることにより、〈むかう；臨席する〉[岩波古語]、〈①高い所から低い所に向かい対する。②統治者として人民に対する。③貴人が下の人のところへ行く。④その場所へ行く。⑤ある場合に出会う。際会する。⑥面している。目の前にする。〉[新潮国語] という意味を表わすことになったわけである。これらの意味に添えられた用例は源氏物語、和泉式部集、徒然草などからであり、かなり古くから認められるものである。この全体を眺め渡してみると、見たり移動したりして行く対象が比較的近くにあるものであることが分かる。これは「望む」の対象が遠くにあるのと大きく異なる点である。それは助詞「に」の力によるものであると考え、意味派生の筋道をよく理解することができる。「に」は古い時代から現代に至るまではほぼ同じ機能を保っており、《密着の対象を示す》[国広, 1967: 224] ということができる。その対象は場所・状態・物などであるが、密着ということは、対象が近くにあってはじめて確かめられ、表現され得ることである。このように考えて初めて「望む」と「臨む」が意味的に派生関係にあることが納得されよう。密着する物とされる物との関係は、単なる位置関係・状態であることもあり、密着に向かって移動して行く点に注意が向けられる場合もある。この静的と動的なとらえ方の違いは認知意味論のいろいろな場合に広く認められる現象である。以上のように両動詞の意味の派生関係を確かめたうえで、改めてその意味の全体を体系的にとらえ直してみることにする。

両動詞の多義の状況

3. 「望む」

I. <遠く広がった空間・景色をながめる>

対象は「大洋，空」などの広く開けた空間であることが多く、「遠い，遙かな」という形容詞が併用されることもある。文型：[人が(場所から)場所を 望む]。

- (1) その墓のあるあたりから古めかしい礼拝堂の前へ出ると，遠く展けた巴里の市街を岡の上から望むことが出来た。(島崎藤村「エトランゼエ」)
- (2) いざ信州へ！ 彼女たちがはるかに望む信州の天地には，今何が待っているのか？(山本茂美「野麦峠」)
- (3) 三階には展望台があり，そこからホテルの庭を越して湖水を望む景色は，美しい。(船橋聖一「雪夫人絵図」)
- (4) 一九六三年七月二十一日早朝，北海道立余市高等学校の一年生だった私はオホーツク海を望む網走市内の小高い丘，天都山にいた。(毛利衛「二十八年後の皆既日食」)

僅かながら「を臨む」という用例がある。これは「を望む」と「に臨む」の混交表現と解される。つまり，何かが眺められる場所であるということと，その場所が比較的近距离にあるということの両方を表現したいという気持ちの現われと見るわけである。

- (5) その頂きに，池を臨んで古びた茶室が立っているのである。(藤原審爾「さきに愛ありて」)
- (6) が，松を抜け，花圃の端に立った白い温室を臨む場所に出た時，...(野上弥生子「真知子」)

「を望む」が裏にかくれているとすると，「茶室・場所」が何かを眺めていることになるが，これは擬人的比喻表現と見ることができる。『計算機』は「のぞむ」に9つの用法を区別しているが，その9番目がこの用法に当たり，「山荘は正面に森を望んでいる」という用例を示している。

II. 〈希望する〉

この意味で用いられる文型には幾つかの種類がある。主語はどの文型でも人間である。

A. [人間が「こと」を望む]

- (7) 現行法のように空文化しないことを望む。(毎日新聞, 社説)
- (8) 安らかな生を終えることを望む限り人はそうであるのほかはない。
(島木健作「生活の探求」)
- (9) ...しかも自分の信じる価値はできる限り多くの人々に信じられているものであることを望むので, (岸田秀「価値の多様化と画一化」)

B. [人間が出来事・状態・抽象名詞を望む]

- (10) 人間はだれでも安心がほしく, 救いを望む。(亀井勝一郎「人間形成」)
- (11) 一見いかに成功し, いかに幸せに見えても, それがその人の望んだ人生でなければ, その人は悔恨から逃れることができない。(立花隆「青春漂流」)
- (12) ほんとうにがむしゃらに姉は, 自分の望む生活を築くために, がんばり続けたのだが, (藤原審爾「さきに愛ありて」)
- (13) 多分もう彼にこれ以上の愛を望むわけにはいかないだろう。(同上)
- (14) そして嫌いな人の不幸を望むのは, 悪に近い。(武者小路実篤「人生雑感」)

C. [人間が人・物を望む]

- (15) ...しかし, 彼が嘗て望んだ母親は決してこんなものではなかった。
(石原慎太郎「化石の森」)
- (16) 「そうさ。あれ以上のお嫁さんを望んだって, なかなか, ありアしないよ。...」(獅子文六「娘と私」)
- (17) 彼女は, ビールより, 日本酒を望んだ。(同上)
- (18) 「おれの肌につけたものを望んだのか」(川口松太郎「新吾十番勝負」)
- (19) むしろ, 消費者が望む物を, 生産者は作るのです。(毎日新聞, 社説)

D. [人間が人間に事を望む]

- (20) 要するに学校教育にそんなことを望むことが無理なのだ。(中谷宇吉郎)

- (21) 妻が主人に出世を望む／会社は部長に問題の解決を望んでいる。
(日本語基本動詞)

E. [人間が(文)と望む]

「と」の前の部分は「したい・しよう」などに終わる欲求・意図を表わす文である。

- (22) 言い表したいものが内にありそれを正確に伝えたいと望むところから、文章の修練が始まる。(永井竜男「正確な文章」)
(23) だからこそ、私も見ておきたいと望んだのだ。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
(24) 「妻になりたいと望んだのか」(川口松太郎「新吾十番勝負」)
(25) ...もっと自信が持てるようになるまで、わたしにはかまわずにいてほしいと望むほどです。(フランク・深町真理子訳「アンネの日記」)
(26) ...それはただ一日もはやく一人前の陶芸家になろうという欲望に支えられたもので、ひたすらそれをつかう人々のためになろうと望んだわけではなかった。(藤原審爾「さきに愛ありて」)
(27) 内面性を失った、陰気臭い、取っつきにくいその顔は、その本の著者たちが私の言語活動に与えようと望んだイメージそのものだった。(バルト・花輪光訳「撮影される人」)

F. [人間が人間を役割に(と)／として望む]

この文型の「に」のあとには文型 D に見られるのと同じ「したい・ほしい」などの動詞が省略されているとみることができる。

- (28) 象山がお菊を見て深く思いを寄せ、いろいろな人を介して妾にと望んだが駄目だ。(子母沢寛「おとこ鷹」)
(29) 友人の娘を息子の嫁にと望む。(基礎日本語)
(30) 相手が名もない家であったなら、基一郎はもちろん彼を養子に望んだであろう。(北杜夫「楡家の人びと」)
(31) 孫を後継者として望む。(日本語基本動詞)
(32) 甥を養子として望む。(基礎日本語)

4. 「臨む」。

第 2 節ですでに触れたように、「臨」の字義はく高い所から低い所を見下ろすであった。その意味を「に+のぞむ」で表わそうとしたわけであるが、低い所は海とか池であることが多く、そういう場所を見下ろすにはその近く

にいたなければならない。そこから〈出来事の場所に近づいて行く〉という意味が派生したものと考えられる。現在の立場から現用の意味の全体を見渡すとき、「臨む」の中心義は〈ある場所の近くにいる；ある場所に近づいて行く〉であるとする、全体がうまく繋がるように思われる。その〈近接性〉を助詞「に」はうまく表わす働きをしている。

4.1 「臨む」の認知対象（＝現象素）。

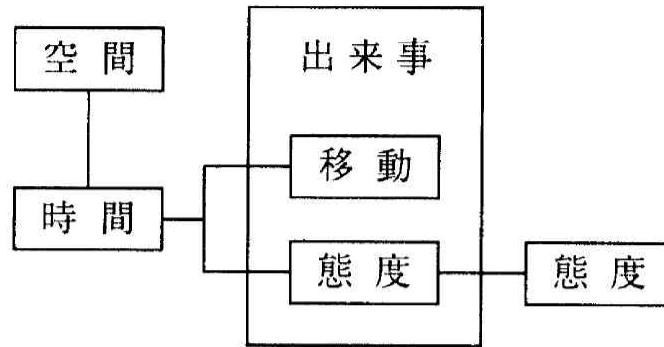
国広 (1994) 以来語義の出発点としての外界の事物を「現象素」と呼んできた。これは言語以前の、認知的に切り取られ、まとめて把握されたものである。それをいろいろと異なった角度から捉えたり、その一部分に当てる焦点の位置をずらしたりして多義が生じると考えてきた。この考え方自体は変わっていないが、名称の一部に「素」という字を用いたために、音素、形態素、意義素などと同じように、何らかの抽象を加えたものという誤解を生じる恐れがあることに思い至り、今回これを「認知対象」と呼び改めることにした。英語では‘cognitum’と呼ぶ（注1）。

「臨む」の多義を分析する場合も、その認知対象を基において考えると状況をよく理解することができると思われる。それは、小高い所から人が海なり谷間なりを見下ろしている図である。それを「ある低い場所の近くにいる」と静的に捉えるか、「ある低い場所に近づく」と動的に捉えるかの違いは、アスペクト的認知の違いによる。同一の動詞で両方の意味を伝えることは動詞によく見られる現象である。例えば英語の‘stand’は文脈により、〈立っている〉（静的）と〈立つ〉（動的）の両方の意味を伝える。以下に示すⅠの意味は静的アスペクトの場合で、Ⅱ、Ⅲは動的アスペクトの場合である。

「臨む」は基本的には空間的な位置と移動を表わすが、移動の場合には〈意図〉の要素が加えられることがある。移動はまた時間的な推移に転義されることがある。

4.2 「臨む」の多義的意味。

以下に5つの意味を区別して示すが、その全体は6つの概念要素でいろいろに結び合わされていると考えられる。結びつきの強さの程度は場合によっていろいろである。



「臨む」に関連のある概念要素の図

この図が表わしていることは、空間と時間はつねに結び付いているものであること、「臨む」の空間的基本義が時間義に転用されること、出来事に参加する人間はその場所に移動しなければならないこと、出来事の性質によってはある態度をもって参加すること、ある時点で「臨む」ときはそこに時間的移動つまり時間の経過が含まれること、またその時点の接近にたいしてある態度を持っていること、その態度そのものが抽象して取り上げられること、などである。ここで抽出した概念要素はほかの動詞の場合にも繰り返して現れる可能性があると考えられる。

I. <場所・建物などが別の通例低い位置にある場所の近くにあり、その場所が見えている>

主語には人間以外のものが来ることが多いが、その場合でも低い場所は見渡せるよになっている点に注意すべきである。この意味に当たる語釈としてほとんどの国語辞典は「向いている。面している。」を示しているが不十分であろう。この「見えている」の部分には元の「望む」の意味が反映していると見られる。『岩波国語』の「臨む」に「目の前にする」とあるのはこの「見えている」点を捉えたものである。

- (1) 寺は海に臨む崖上にあった。(三島由紀夫「金閣寺」)
- (2) 数日前、相模湾に臨むこの小さな山の中腹に、「湘南刑務所」が開所し、(井上ひさし「ブンとフン」)
- (3) 「岬の蜩」では戦時中に満州に渡って辛酸を舐め、今は玄海灘に臨む村の高みの家に一人で暮らす老女が来し方を語り、胸の内にわだかまる思いのたけを訴える。(毎日新聞、読書)

- (4) 月が、日本橋通りの高層建築の上へかかる時分、貝原は今夜は珍しく新川河岸の掘に臨む料理屋へ小初を連れ込んだ。(岡本かの子「巴里祭・河明り」)
- (5) 観覧席のように河原に臨んだ斜面の林の中に、私は眼を凝らして球形の懸垂物を探していた。(大岡昇平「野火」)
- (6) 低地を距てて、谷に臨んだ日当たりのいいある華族の庭が見えた。(梶井基次郎「冬の日」)
- (7) 馬車が海岸に臨んだ高い崖の下まで行くと、馬丁はそこで馬を締めた。(島崎藤村「エトランゼエ」)
- (8) 港に臨んだ丘の斜面をすっかり下り切ると、再び河口に近く架けられた弁天橋に出てきた。(島尾敏雄「単独旅行者」)
- (9) 町はずれの濠に臨んだささやかな家で、独り住まいには申し分なかった。(志賀直哉「濠端の住まい」)
- (10) 少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。(中島敦「山月記」)
- (11) セエヌ河に臨んで立つ錆び黒ずんだ石の建築物はそこに大寺院としての側面を見せていた。(島崎藤村「エトランゼエ」)
- (12) 海に臨んで建てられた山津の家は、二階の棟上げも高く、外側の格子や柱は赤く塗られてあり、想像以上に立派なものでした。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)

ここで例外的な实例に触れておく。「臨む」は必ず「に」をとると言ってもよいが、1例だけ「へ臨む」がある。これは「に」と「へ」の機能が一部重なっているためであると考えられる。

- (13) いもりだ。まだ濡れていて、それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、じっとしていた。(志賀直哉「城の崎にて」)

II. <ある重要な時点に近づく>

これは空間的用法が時間に転用される時空間推義の例である (cf. 国広, 1997: 218)。前項の用法では隠れていた<移動>の要素がここで現れる。この時点はそれに近づく本人にとって重要な意味を持つものであり、その心理にある圧力を加えるものである。「別れに臨んで」では別れの辛さがあり、

「死に臨んで」では死への恐怖などがある。類義語として「に近づく・に当たる」があるが、こちらにはそのような心理的な圧力は含まれていない。これは空間的用法で見られたところの、対象物が目の下にあり、まかり間違えばそこに落ちて行く可能性があることが反映しているのではないかと見られる。

- (14) 生涯の終りに臨んで、自分をもう一度底の底まで掘り下げ、生涯抑えに抑えてきたモチーフを一切吐き出そうとする。(奥野健男「太宰治の人と文学」)
- (15) そのせいか、彼女の見せた花嫁の態度というものが、一生の大事に臨んで、あまり悪びれず、落ちつきと、品位を保っているかのように私を感動させた。(獅子文六「娘と私」)
- (16) 「しかし、フランス人というものは、危窮に臨むとなかなか見上げたところがあると思ったね。…」(横光利一「旅愁」)
- (17) 歴史を学び、あるいは伝説の中の英雄物語を読み、最も日本人らしい人間はこういうときどう行動するだろうかと考え、特に危機に臨んだような場合に強くなれるのである。(山崎正和「エスニック・ジョークと文化論」)
- (18) その中でなんらの危害をも感ぜぬらしく見えるのは、いちばん恐ろしい運命の淵に臨んでいる産婦と胎児だけだった。二つの生命はこんこんとして死のほうへ眠って行った。(有島武郎「小さき者へ」)

III. <ある出来事に参加するためにその場に移動する>

これは空間的な「臨む」を動的なアスペクトでとらえたものである。この場合には、空間・時間・移動・参加の要素が関与している。

- (19) 英国を公式訪問した天皇、皇后両陛下はエリザベス女王主催の公式晩さん会に臨んだ。(毎日新聞)
- (20) が、正式の舞踏会に臨むのは、今夜が初めてであった。(芥川竜之介「舞踏会」)
- (21) 朝早くから、化粧だの、着付けだのと、周囲から騒ぎ立てられる日本の花嫁が、魂のヌケガラのような放心状態で、式場に臨むのも、当然といえるだろう。(獅子文六「娘と私」)

- (22) キルギスでは、ウズベクの軍事顧問の増強が続き、拉致現場の近くでは、両国の特殊部隊が合同の掃討作戦に臨んでいる。(朝日新聞)

IV. 〈ある態度・態勢で出来事に参加する〉

この意味は前項から派生したものである。人間がある出来事に参加するとき、場合によってはある態度・態勢が決まっていることがある。その方に重点が移ったのがこの用法である。

- (23) 「毎年、この独演会には最高の状態で臨むようにしています。」(毎日新聞、生活)
- (24) ...橋本竜太郎政権に対する閣外協力を解消して、野党の立場で参院選に臨む方針を確認した。(毎日新聞、社説)
- (25) 来年の春闘で、日経連はこれまで以上に「ベアゼロ」という考えを強めて交渉に臨んでくるだろう。(同上)
- (26) 与党 3 党の間で懸案となっていた 2 大問題はこれで片付き、与党は野党との国会論戦に臨む態勢を整えたことになる。(毎日新聞、社説)

V. 〈ある事柄にある態度で対処する〉

この意味は前項 IV に繋がったもので、重点がずれたものと見てよい。ある場所への移動の要素が薄れ、心的な態度に重点が移っている場合である。その態度は、「...で・...をもって」などの形で文中に表現されることが多い。これは意味の抽象化の一例とも言える。

- (27) 石中先生は、いつも、中腰の不安定な格好で生活に臨んでいる。(石坂洋次郎「石中先生行状記」)
- (28) 長井家は、土岐家の支族としても最大のものだから、庄九郎がこの家を継いでこの家の名において美濃の政治に臨むならば、少々の荒療治もできるであろう、と利隆はいうのだ。(司馬遼太郎「国盗り物語」)
- (29) 岡田中將は澤田戦訓に拘らず、同じような東洋的責任観をもって裁判に臨んでいる。(大岡昇平「ながい旅」)
- (30) 一度は注釈の世話になるのもよいが、あとは邪魔になるばかりであり、捨てたほうがよいくらいである。いやそれくらいの覚悟をもつ

て書物に臨んだほうがよいというのである。(山本健吉「古典について」)

- (31) 私は始終自分の力量に疑いを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。(有島武郎「生まれ出づる悩み」)
- (32) 「預金集めに力を入れる時代ではなく、郵貯からの流出資金の吸収には自然体で臨むことになりそうだ」(毎日新聞、経済)
- (33) もっと言えば、知覚に際して私たちは過去の経験に基づく予想をもって臨んでいるのである。(中村雄二郎「感覚と知覚が開示するもの」)
- (34) ああ、門前に安置せられた二個の大なる石獅よ、よくおまえたちは永い間王宮の正門を守ってくれた。寒い時も暑い時も少しもその姿を乱さずに、近づく者の心に権威を持って臨んだ。(柳宗悦「光化門」)
- (35) 取り組みの甘いところに対しては一層のリストラなど厳しい姿勢で臨むべきだ。(毎日新聞、社説)
- (36) 「特段の事情がないかぎり、まさしく極刑をもって臨むほかない。」(同上)

5. 「臨む」の多義体系。

以上に見てきたところから、「望む」と「臨む」は意味的に繋がりがあることが明らかとなった。さらに「望む」は心理的方向性といえる〈希望する〉という意味を派生させており、「臨む」は事柄に向かう心理的な方向性を示す〈ある態度で対処する〉という意味を派生させていることも明らかとなった。そこで両動詞の多義を「具体的～心理的」という軸を中心にして体系化してみることにする。

	具 体 的		心 理 的
を望む	眺める		希望する
に臨む	静的	近くに存在する	ある態度で対処する
	動的	に近づく	参加の意図を持って接近する

「のぞむ」の多義体系

のびる

1. 「のびる」の訓漢字。

「のびる」については、訓漢字として「伸」と「延」のどちらを使うかという、かなりややこしい問題がある。この漢字の使い分けはかならずしも安定しているとは言えず、国語辞典における扱いもまちまちである。その扱いは4種類に分けられる。『大辞林』などは見だし語の下にまとめて【伸びる・延びる】としているのみで、語義部分では訓漢字にいっさい触れていない。『大辞泉』などは見だし語はひとつであるが、語義ごとにどちらの漢字が用いられるかを示している。『角川必携』などは見だし語はひとつであるが、語義部分を大きく二分している。『三省堂』などは「伸びる」と「延びる」を別見だしにしている。扱いが異なるにしても、その区別が一致していれば問題はないわけであるが、細かく検討してみると、かならずしも一致していない。例えば「よくのびる塗料」という場合、『大辞泉』と『三省堂』は「伸」を使うとしているが、『学研現』は「延」を使うとしている。また「徹夜続きでのびてしまった」という時も同じく前者は「伸」、後者は「延」である。この例では手元にも両方の実例がある（cf. 以下に示す(9)と(10)）。一方、時間関係の用法ではどの辞書も一致して「延」を示す。これはおそらく「延期」という漢語の支えによるものであろう。このような次第であるので、以下では実例を除き、訓漢字は用いないことにする。

2. 「のびる」の多義。

「のびる」の多義の記述に関してはどの辞典もほぼ一致している。ただし用例の解釈・分類についてはときに問題がある。本論考の主眼は、多義の派生関係を明らかにすることにあるので、辞典に用いられた簡単な用例を利用しながら、考察を進めて行くことにする。

比喩的用法も含めて全体を見渡したとき、「髪がのびる」などく細かい物が長くなる」という意味を中心に置くと、全体が無理なくまとまると考えられる。

I. く細長い物が長くなる「髪・ひげ・草がのびる」

ここに属する用例として「背がのびる」があり、それと似た言い方として「背骨がのびる」があるが、意味は異なっている。「背骨」の方は次のⅡの用法に属する。「鉄道がのびる」、「バスの路線がのびる」はやや比喩的で

あるが、ここに属する。

II. <曲がっていた細長い物が直線状になる>「背筋・背骨・腰がのびる」

この用法は意味だけを見ると I とかなり異なる。I では長さが変化するのであるが、II では長さは変わらず、形が変わるだけだからである。しかし意味論的にいうと、両者は繋がっている。背筋などが曲がっている段階では全体は「短く」見えるが、まっすぐにすると「長く」つまり「のびて」見えるということが一つ、もう一つの理由は背筋などを「のばした」結果の一直線というのは I の場合の結果の長い状態と同じであると見ているためである。つまり結果状態の一致に基づいて派生した用法ということになる。結果状態が同じならばその過程は問わないという認知方法を我々は持っている。これは国広（1985：§5）でいう「痕跡的認知」の一例である。これは物の形や位置関係を、実際はそうでないのに、変化や移動の結果であるかのようにみなすことをいう：「この道は右に折れている」、「その家は表通りから引っ込んでいる」など。以下に痕跡的認知と解される実例を示す。形が一直線であることを強調するために「ピンと、スッと」などの副詞が添えられている点に注意して頂きたい。以下の用例中、(2) と (4) が II に属し、あとはすべて I に属する。

- (1) 眼鏡橋から真っすぐに伸びた道を歩きながら、道すがらの古美術店を、私たちはのぞいてみた。(林京子「ギャマンビードロ」)
- (2) おばあちゃんは昔は踊りの名手だったそうだから、背筋がピンと伸びている。(加藤幸子「夢みる雑草たち」)
- (3) 少女は固くしまった細い足とすんなり伸びた腕を持っているし、木登りもすれば野山も駆け巡る。(中沢けい「僕が僕という理由」)
- (4) スッと伸びた背筋、(檀ふみ「春の匂い」)
- (5) その防波堤は、青い入り海に一筋に延びていた。
- (6) ピアニストのように細く伸びたゆびだった。(新田次郎「孤高の人」)
- (7) 門の両翼の土塀、卵色の典雅な土塀、門から山内へと伸びる敷石の道、(倉橋由美子「暗い旅」)
- (8) 少しは身体を動かしたい。何をしようかと地図を睨んで、谷に沿って延々と伸びる遊歩道を見つけた。(池澤夏樹「人は山に向かう」)

III. 〈物の表面のしわが平らになる〉「しわがのびる」

これは前項Iからの派生用法であり、線的な現象を面的な現象に派生させたものである。この次元間の派生現象はあとの VIII でも見られる。

IV. (a) 〈(ゴムが) 長くなったまま元に戻らなくなる〉「ゴムテープがのびる」

(b) 〈(麺類が) 茹だり過ぎて長くなり弾力を失う〉「このそばはのびている」

(a), (b) 共に物が長くなった状態をとらえて「のびる」を用いているが、実際に意味するところは、物が弾性を失うことである。II で長さの変化を仲介として形の変化を意味したのに対して、ここでは長さの変化により質の変化を意味している。そば・うどんをどんぶりの汁に入れたまま長く放置しておくと柔らかくなり過ぎてまずくなるが、その時にほんとうに長くなることを確認した人があるかどうか知らないが、柔らかいのを長くなったためと主観的に認知した結果この用法が生まれたものであろう。

V. 〈極度の疲労で体力を失う〉「徹夜続きですっかりのびた」

極度に疲労した場合、必ずしも横になって長く見えるような状態にあるとは限らないが、そういうことが多いので、その点をとらえてこの表現を用いるものと思われる。死体も同じような状態になり得るが、死体については「のびる」は使えない。代わりに「横たわる」、「ころがる」を用いる。

(9) 草の堤に仰向けに伸びているけが人も少くない。(井伏鱒二「黒い雨」)

(10) 行き倒れの酔っぱらいが路上で延びているように、絶えず床の上に転がって宙を見つめていたウィリィ、(米谷ふみ子「遠来の客」)

VI. (a) 〈時間が予定・予測よりも長くなる〉「日本人の寿命は大幅にのびた」

(b) 〈出来事の実現が予定よりも先になる〉「事故で出発がのびた」

この項の用法は、基本の空間的用法が時間に移された派生義の例である。

(a) と (b) の違いは、(a) が 2 時点間の時間が連続的に認知されているのに対して、(b) では、予定の時点と実現の時点の 2 つの時点だけに焦点が合わされているところにある。これも言語によく見られる「点と線」の対立の問題

である (cf. 国広, 1967: 88, 144; 国広, 1970: 118, 249)。

VII. <物の表面を薄くおおう粘体の占める面が広がる>「このワックス・ペンキ・糊はよくのびる」

この用法は粘体について用いられるものであるが、次の例は「庭園」について用いられている。

- (11) 彼は自分の宏大な、広々と延びて居る庭園を見ながら... (菊地寛「真珠夫人」)

これは 1 次元的な中心義 I が 2 次元に派生したものである。次元的な派生の例としては、もう一つ 3 次元的な「ふとい棒」が 2 次元的な「ふとい線」のように用いられる場合がある。

以上の 7 つの用法は線にせよ面にせよ、形の変化に関するものであったが、次の VIII と IX の用法では、長くなった物の到達点に重点が置かれている点で他と区別される。

VIII. <目的物に手などが達する>「つい甘いものに手がのびる」

「のびる」の主語は「手」、手の延長である「箸」、ショベルカーの「アーム」などである。この表現は、人間の意思とは無関係に「手」などがそれ自体で動くように表現している点が注意される。これは日本語に広く見られる状況中心表現の一つである。そこでは、実際には人間が関与しているにもかかわらず、人間を背景に押しやって表現しない。自分で転居しておいて、「今度住所が変わりました」などと言うのがそれである。

- (12) 誰かが怒鳴るように声をかけるのを、櫛まきお藤はあでやかに笑い返して、又しても白い手が酒へ延びる。(林不忘「丹下左膳」)
 (13) 平次の手はサッと延びて、お鶴の左の手首をピタリと掴みます。(野村胡堂「七人の花嫁」)
 (14) そこでいそいそもう 1 コと箸がのびることになる。(開高健「新しい天体」)

この用法を抽象化して「手がのびる」は<官憲の力が及ぶ>という意味が

派生している。

- (15) 十七万円盗難事件のあと寮母の金原園子が神田署に盗難届を出したため、捜査の手がのびると、(賀川乙彦「湿原」)
- (16) 大々的な検察の手が伸びることは火を見るより明らかなことだったので、(井上靖「射程」)
- (17) 自分の上に裁きの手がのびること、否、裁き、どんな形ででも裁きというものを思いうかべたことすらなかったでしょう。(武田泰淳「審判」)

IX. <話題など抽象的なものが及ぶ>

国語辞典にはこれに当たる用例が見当たらないので、実例を示す。

- (18) 夜の集まりの時、話題はそうした方面にまで伸びることがあった。(島木健作「生活の探求」)
- (19) 女は私の書いたものを大抵読んでいるらしかった。それで話はそちらの方面へばかり延びていった。(夏目漱石「硝子戸の中」)

こういう場合、現在は「及ぶ」を使うのがふつうで、「のびる」はほとんど使われない。

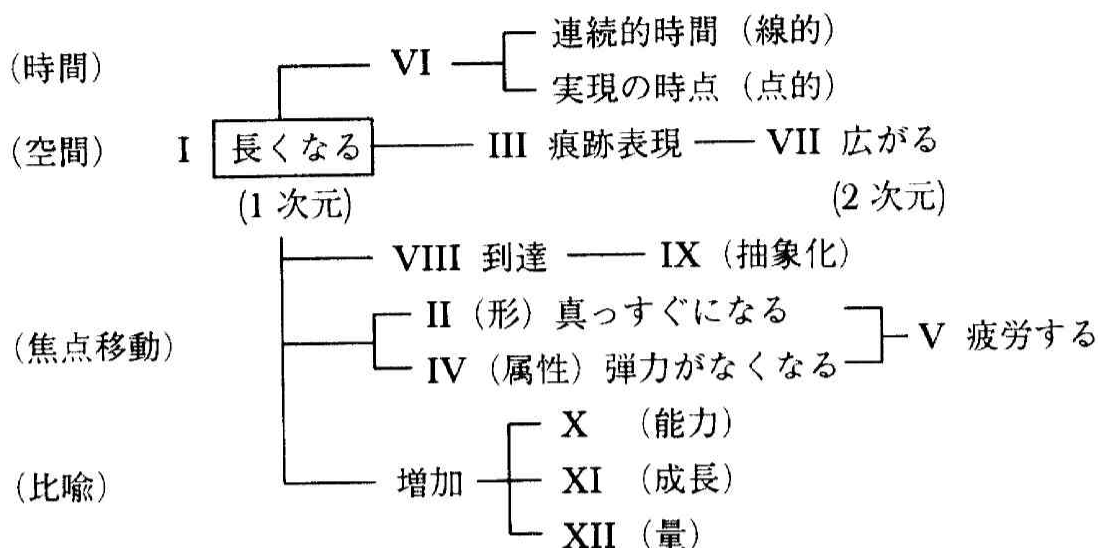
X. <能力が向上する>「学力がのびる／成績がのびる」

XI. <成長する>「若い人はのびる」

XII. <数量が増加する>「輸出がのびる」「消費がのびる」

X から XII は抽象的な比喩用法である。

3. 「のびる」の多義体系。



【注 1】‘cognitum’は OED (オックスフォード英語大辞典) に ‘An object of cognition’ と定義されており、一番最後の用例として次のものがある：1936 *Mind* XLV. 182 Let us next agree to call a *cognitum* any *terminus ad quem* of the activity called ‘experiencing’. (次に「経験」と呼ばれる活動の到達点を *cognitum* と呼ぶことにしよう。)

参考文献

- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論—日英両語対照研究』三省堂。
 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』三省堂。
 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」, 『言語研究』No. 88, 日本言語学会。
 国広哲弥 (1994) 「認知的多義論—現象素の提唱—」, 『言語研究』No. 106, 日本言語学会。
 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店。

辞書略号解

- 『岩波国語』 西尾実ほか編 岩波国語辞典第六版 (岩波書店, 2000年)
 『岩波古語』 大野晋ほか編 岩波古語辞典 (岩波書店, 1975年)
 『岩波新漢語』 山口明穂・竹田晃編 岩波新漢語辞典第二版 (岩波書店, 2000年)

『角川必携』	大野晋・田中章夫編 角川必携国語辞典（角川書店，1995年）
『漢字語源』	藤堂明保著 漢字語源辞典（学燈社，1965年）
『基礎日本語』	森田良行著 基礎日本語辞典（角川書店，1989年）
『計算機』	計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL（情報処理振興事業協会，1995年）
『言泉』	林大編 言泉（小学館，1986年）
『三省堂』	見坊豪紀ほか編 三省堂国語辞典第四版（三省堂，1992年）
『字通』	白川静編 字通（平凡社，1996年）
『新漢和』	諸橋轍次ほか編 大修館新漢和辞典改訂版（大修館書店，1983年）
『新潮現代国語』	山田俊雄・築島裕ほか編 新潮現代国語辞典第二版（新潮社，2000年）
『新潮国語』	山田俊雄・築島裕ほか編 新潮国語辞典第二版（新潮社，1995年）
『新明解』	山田忠雄ほか編 新明解国語辞典第五版（三省堂，1997年）
『大辞泉』	松村明編 大辞泉（小学館，1995年）
『大辞林』	松村明編 大辞林第二版（三省堂，1995年）
『日本語基本動詞』	小泉保ほか編 日本語基本動詞用法辞典（大修館書店，1989年）

* 本論考の先行編は以下のように発表されている。

- 「日本語動詞の多義体系 (1)」『人文学研究所報』No. 32. 神奈川大学人文学研究所，1999.
- 「同 (2)」『人文研究』No. 138. 神奈川大学人文学会，1999.
- 「同 (3)」『神奈川大学言語研究』No. 22. 神奈川大学言語研究センター，1999.
- 「同 (4)」『人文学研究所報』No. 33, 2000.
- 「同 (5)」『神奈川大学言語研究』No. 23, 2001.